

夏虫行燈

吉川英治

青空文庫

風かぜい入れ異変

一

迅い雲くもあし脚である。裾野の方から墨を流すように拡がって、見る間に、盆地の町——甲府の空を蔽おおつてしまう。

遽にわかに、日蝕のように晦くらかった。

板いたすだれ簾の裾は、大きく風に揚げられて、廂ひさしをたたき、庭の樹

々は皆、白い葉裏を翻かえして戦そよぎ立つ——

『おう。雷鳴か』

かみなり

昼寝をしていた高安平四郎は、顔に乗せていた書籍ほんを落して、

むくりと寝転ねがえると、

『……襲くるかな？ 一暴ひとあれ』

頬杖ほおづえついて、廂越しに、暫く雲行くもゆきでも観測しているように、

眩くらいた。

——と。その睫毛まつげの先を、白い電光いなびかりが、チカツと掠かすめて、
霹靂へきれきはすぐ屋やの上を翔かけ廻まわった。

『お、大きいぞ。——これやあ、出向しゅつじやうかざばなるまい』

平四郎は、匆はね起きて、すぐ身支度じたくした。

甲府城の森や天主には、過去に幾度たびも落雷の歴史がある。その

都度、火災を起しては、苦い経験を重ねているので、大きな雷鳴の伴う風雨には、たとえ非番の者でも、即刻、お城へ馳けつけるという掟おきてになっている。

もつともそれは、俗に『番衆ばんしゅう 番衆ばんしゅう』と称よばれる軽輩の番士役に限ってはいたが。

平四郎は、その組役の一人で、番衆長屋に住む気軽な独り者、然し、年齢としはわりあいを取っていて、もう三十は超えていた。

『おい、婆や、お城へ行つて参るぞ』

庭へ呶鳴どなつて――

『五刻いつくを過ぎたら、お城へ泊つたと思つてよい。戸締りして、早く寝めよ』

と、云いたした。

あじさい紫陽花や八ツ手が、海のように揺れている裏庭の方で、

『はい。はい』

婆やの返辞がしたが、ふと、縁先に取り込んである、一抱え程ほしものな干衣を見ると、中に、艶あでやかな女着物おんなものが一枚、紛まぎれこんでいた。

『はて、こんな物は、家には無い筈だが——。婆や、婆や、何処から取り込んで来たのだ』

云っているうちに、婆やは又、次の一抱えを、持って来て、縁先へ置いた。

その中にも、羅うすもの衣おんなこそでの女小袖しんぎだの、扱帯しんぎだのがあつた。

『——旦那様。それは多分、上のお屋敷からでございましょう。』

きのうも今日も、虫干をして居らっしやいましたから、風に舞つて、お庭の中へ、吹き落ちて来たに違いございませぬ』

『ウム、萩井はぎい家のか』

平四郎は、その衣裳を手に持つて、下り藤さがの刺繡ふじ紋ぬいもんを見ながら
 呟いた。

婆やも、眼をみはつて、

『たいそうお金に飽かせた衣裳でございますの。京きょう染ぞめの裾す

模様そもよう——』

『婚礼着だな』

『きつと、お小夜様さよさまの……』

『こんなもの！』

平四郎は、それを、ふわーつと庭先へ抛り投^{ほう}げて、婆やへ云つた。

『風に舞つて来たとはいえ、これ見よがしな贅^{ぜいたくもの}沢衣裳、取り込んで置くには及ばん。崖の下から呶鳴つて、萩井家の者に、取りに来いと云え』

庭へ捨てられた裾模様へ、もう白い雨の線が、斜めに降りかけていた。

その間にも、雷^{かみなり}鳴は、絶え間なく鳴りはためいて――

甲府の御番城は、平城ひらじろだった。

城主はない。

幕府から支配役をいいつかつて、御城番として松野豊後守まつのぶんごのかみ、加役として宮崎若狭守みやざきわかさのかみ——何どつちも千五百石程度の旗本が、甲府在住で、これを守っているのだった。

『やあ、お出合御苦労』

『よいあんばいに、大した事もないらしいな』

詰め合つた番衆たちは、持場持場で、そう云い合つた。

陽暮れ方ひ——雲は切れて、笛吹川の上流かみの空は、淡い虹うすさえ見せた。

『これだから、夏中は非番の日でも、おちおち落々休んじや居られぬよ』

『拙者も、きようは大丈夫と、かまなしがわ釜無川の瀬へ、はや鮎を釣りに出か

けて居ったところ——あの雷鳴だ』

『——が、まあ無事でよかつた。休みはまだ三、四日あるし』

ふだんは二日詰づめの一日休みであつたが、この土用中は、交代に七日ずつの賜暇しかをもらつていた。

空を見さだめて、非番の者たちは、夕虹の下を帰つて行つたが、

平四郎は、とのい宿直部屋の同僚と話しているうちに、しやうぎ将棋が初まつ

たので、ともしびつい燈火を見てしまった。

すると、同僚のさいがたんじ雑賀丹治が、

『高安。ちよつと顔を——』

と、外へ誘つた。

『なんだ？ ……』

『まだ其そこもと許は知るまいな。御城内でも、内密に伏せておるから』

『知るまいとは』

『貴公が聞いたなら、定めし小気味よがる事だろうと思つて、そつと耳に入れるわけだが、図書係りの海野甚三郎な、何うやら、切腹ものらしいぞ』

『えつ、海野が』

『されば』

『いったい、それは何どうした理わけ由で』

『貴公に取つては恋こいがたき敵——まあ隠さんでもいいさ——その海

野甚三郎が、切腹ものとは、耳よりな話じゃないか。萩井家のお小夜どのを挾んで、甚三郎と其許そこもとのあいだに、紛争いきざつのあつた事は、おれも薄々知っていた』

『そうか、海野が切腹となるのか』

『いや、まだ決まった事ではないが、九分九厘までは……という破目になっておるのだ。もつと詳しい事を聞かせたいが』

と、見廻して、

『そうだ、彼れあへ行かないか』

と、櫓門やぐらもんのある堤どての陰へ誘つた。

三日ほど前から、御番城の蔵くら方かたでは、武器係り、道具係り、図書係りなど総勢で、例年のように、御蔵の風入れにかかつて、毎日、虫干ほしに忙殺まじされていた。

事件は、つい昨日きのうのこと。

御蔵奉行の岩瀬志摩いわせしまが、台帳にあわせて、順々に、検分してくるうち、図書係り海野甚三郎が持場の品が一点、不足している事実を発見した。

しかもそれは、この甲府城の宝物中でも、代表的なもので、曾かつては、將軍の台覧にも供え、元禄年中の城主柳沢吉保やなぎさわよしやすも、垂涎すいせん措おかなかつたといわれる——土佐光吉とさみつよしの歌仙このえのぶたに近衛信

尹だの讚さんのある——紙数にすればわずか十二、三枚の薄じょうい帖だつだつた。

(あれが紛失したと！)

居合した者は青くなつて、

(一大事だ。何と、幕府おかみへ云い訳を——)と、騒さわぎ立つた。

奉行の岩瀬志摩は、

(詮議せんぎの邪よこしまげになる。ここにおる者以外への口外は、一切差し控えられたい。——係り海野甚三郎は、お品の出るまで、退城はならぬ)

と、云い渡した。

で——昨日から、甚三郎は、一室に閉じこめられ、紛失した歌

仙本の行方には、密々、厳しい捜査が行われているが、今日に至るも、行方ゆくえはとんと分らぬらしいというのである。

×

×

×

×

『虫干の御蔵収めは、後四日。——その四日のうちに、紛失物が出なければ、甚三郎は、切腹するしかない。——まあ事情は、こういう理由わけだが』

と、雑賀丹治は、薄ら笑つて、

『そんな破目はめにある甚三郎を、悪く云うではないが、日頃からいやに君子ぶつて、美いい男を鼻にかけ、交際つきあいはしない奴だから、誰も同情する者はない。——この事件を、知っている者は、あい

つ近頃、お小夜どのとの縁談で、ふわふわしているから、こんな失態を起したのだろう——と誰も皆、云つておる』

ちようど、五刻いつつの鼓こが、櫓やぐらで鳴つた。

『ふーム、そうか。……そういう事情わけか』

とのみ領うなずいて、平四郎はただ聞いていたが、平四郎は、決して愉快うきそうな顔いろではなかつた。

『どれ、帰ろうか』

丹治と別れて、彼は、帰途についた。

城の乾いぬいもん門もんでは、果して、奉行の下役が詰めていて、退城の

者を止め、いちいちとど体からだ調しらべをして通した。

平四郎も、あらた検められた。

『何か、御城内に、変った事でもあつたのでござるか』
知らぬ顔して聞くと、

『いや、ちと……』

と、口を濁して、役人たちは、真相に触れることを避けた。

葉隠れ恋

——見たことか。人の思いでも。

同僚の前では、そんな顔は見せなかったが、平四郎は心のうちで、そう思わないこともなかった。

甚三郎とは、お互いに、終生、解けない宿怨に結ばれている仲である。

『萩井家のお小夜も思い知つたろう』

星になった夜空の下を歩きながら——彼は苦笑した。

——あの甚三郎さえなければ、お小夜は、自分の妻となつてい
る筈の女だ。

(ちようど、こんな、星の夜だった……)

と、彼は今も思い出される。

一夏、笛吹川の畔ほとりで、溺おぼれかけている少女を救ったことがある。乳母らしい女のさけび声に、馳はけつけてみると、それは御番城の兵学教頭、萩井十太夫の娘。

身を挺ていして、激流の中から彼が救い上げて来た娘は——その頃まだ軽かった。十四ぐらいな愛くるしい少女おとめで、お小夜という名は、後に知ったのである。

(娘の恩人だ)

と、いうので、それ以来、平四郎は萩井家の家族から、特別親しく扱われた。

お小夜も、年経たつほど、親しみを見せ、又、妙齡の美しさを増して行った。

——それはもう、七年前になる。

然し今では、萩井家の家族はどうか。

彼女が、自分を見る眼はどうか？

以前とは、まるで違う！

ひと頃は、彼女の聳むこに——と、堅い約束こそしないが、口に洩も

らさぬばかりに、萩井家の家族は皆、自分を遇したものだ。

自分も、いつか心に、彼女を未来の妻として、抱いていた。

その為に、勉強した。誰よりも励んだ。兵学も、剣道も、弓道も。——やがて萩井十太夫の後を継いでも、

(彼なら恥しくない)

と、云われる迄、自分を鍛きたえて置こうとしたのも、その希望が

あるからだつた。

二

海野甚三郎は、そうした折へ、忽然と、帰つて来た。甚三郎は、長崎へ遊学していた者である。新しい蘭らんがく学も、西洋兵学も、砲術も、あらゆる新知識を蓄たくわえて帰つて来たばかりか、家すじも、平四郎と比較にならないし——何よりは又、彼は美貌で拳止も正しく、品行もよかつた。

(甚三郎様、甚三郎様)

萩井家の家族たちは、皆、彼の知識や新しい話に傾倒した。

わけて、お小夜は、彼に依つて、蕾つぼみの春を、訪れられたように、急に、容子まで變つて来た。

そのうちに、間もなく、甚三郎は正式に、縁談を持ちこんだらしい。異議なく纏まとまつて、この五月には挙式を——と云う噂だったが、十太夫がふと病床に就いたので、秋までに延期されたのだつた。

だが。

平四郎にとっては、延びようと、何日いつになろうと、それはもう、萩井家から云わせても、関かかわりのない他人でしかない。

生憎あいにくと又、平四郎の住居すまいは、萩井家の崖下で、心の外に置こうとしても、何かにつけて、崖上の屋敷の様子は、手に取るよう

に映るのだった。

未練がましく、近くに住んで居たくないとは、重々思う事であったが、崖下の番衆長屋は、いわゆる組屋敷で、勝手に転居する事も許されない——

おうおう
 快々と、楽しまない日を、幾月もうそこで暮したことか、人知れず葉隠はかくれに燃えて腐つて、やがて散るしかない——真紅しんくの花の悩みのように。

近頃は、兵書、剣道の修行も抛つて、くさくさすれば、町へ出て、居酒屋の床しょうぎ几ぎを占めた。——そんな事から二、三の同僚のうちでは、

(まあ、我慢せい)

とか、

(お小夜ばかりが女じゃなし、もつといいのを持って見返してやるさ)

とか、同情する者もあつた。

けれど彼の意中には、そんな程度の言葉では、慰めきれないものがある。——又、今日聞いた甚三郎の破滅を知つても——猶々、慰めきれないものがある。

それは、お小夜の心だつた。

何うして、彼女が、自分に反そむいて、甚三郎へ傾いて行つたか——

恨みつらみは、親の十太夫にもない、家族たちにもない、甚三郎にもない。

唯、^{ただ}彼女のそれにあつた。

三

帰りがけ——その晩も、いつもの居酒屋に立寄つて、平四郎は、『亭主、冷酒^{ひや}でよい、一杯くれい』

薄暗い片隅の床^{しょうぎ}几に腰かけて、黙然と、肘^{ひじ}をついていた。

誰か、後でコソコソ話し声があるので、何気なく振向いてみると、土間から上つて、三畳ばかり敷ける小部屋に、衝^つ立^{たて}を置いて、飲んでいる二人の浪人者の腰だけが見えた。

『——だって、何うせ京都へは上らなければなるまい』

と、一方が小声でいう。

『それやあそうだが……』

『してみれば、山越えして、奥多摩おくたまから武州ぶしゅうへ出るなんて、嶮けんな道をとって、しかも廻り道したりするよりは、江戸表へ寄らずに、真つ直に京都へ出てしまおうじゃないか』

『中山道なかせんどうを取ってか』

『いや、そう行くのは、誰も考える所だから、裾野へ出て五湖を横ぎり、東海道へ突き抜ける』

『ウム、だが何っ方ちにしても、もういちど、市之丞いちのじょう様に会った上で——』

と、云いかけた時、一方の浪人が、

『叱……』

と、目くばせして、膝ひざを小突こづいた手が、衝立の陰にちらと見え
た。

平四郎は、耳にも止めない様子をして、

『亭主、きよようの酒は、いつもの酒とは少し違いはせぬか。——
もう一つ、酌ついでみてくれ』

その間に——二人の浪人は、土間の草鞋わらじへ手を伸ばして、

『勘かんじよう定じようは置いたぞ』

やや慌あわて気味に出て行つた。

四

市之丞。——確にそう聞えた。妙に、その名が、平四郎の耳へ残った。

(この城下で、市之丞と名乗る者は? ……)

と、考えていると、

『旦那、召上つてみて下さい。樽たるを代えてみましたが』

と、亭主がそれへ、榊ますでなみなみと、次のを酌くんで来てそつと渡す。

『おやし』

『へい』

『今出て行ったのは、毎度ここへ見える客か』

『いいえ、先刻さつきの雨上りに、飛び込んできたフリのお客でござい
ます』

『江戸者のようだな、言葉や物腰ものごしが……』

『左様でございます。けれど、何かお話の様子では、青沼の光こうた
沢寺くじに泊くつて居くるような口吻くちぶりでございましたが』

『光沢寺といえは——一蓮寺の別院だな』

『はい、左様に聞いておりますが』

『ふう……む』と、何か独り頷いて、

『亭主、きょうのも又、お帳面だぞ』

『へいへい、何日いつでも』

平四郎は、ぶらぶら帰かえつて来たが、五刻いつつ過ぎたら寝ろといつて

おいたので、婆やはもう戸締りを固くして寝ていた。

戸を軽く叩いて、呼び起しているまに、彼は、崖上の萩井家の灯影ほかげの辺りから、微かすかに、琴の音が流れて来るのを聞いた。

『……才。お小夜はまだ、知らないと見える』

平四郎は崖を仰いで、ふと唇を噛んだ。

婆やが、眠たい顔して、戸を開けた。平四郎は家に這入るとすぐ、

『昼間、風に吹かれて、紛れ込んで来た女小袖は、萩井家へ返してくれたか』

『はい、お返しいたしました』

『誰が取りに来た？』

『わたくしが持つて行つて、裏門にいる小者へ渡してやりました』
 聞くと、平四郎は不機嫌に、

『だれが届けて遣つかわせといつたか。崖の下から呶どな鳴つて、取りに
 来いと云つてやれと、吩いいつ付けておいたではないか。——何で此方こちら
 から持つて行くような弱味がある。禄ろくの高下はあるが、萩井家も
 武家なら、高安平四郎も武家だ。——ばかなツ』

と、珍らしく老としより婆を叱つて、仆たおれるように、寢床へ横になつ
 てしまった。

宿怨の 介錯かいしゃく人

一

詮議^{せんぎ}は、極秘^{ごくひ}の裡^{うち}に行われて^ういるらしい。
萩井家でさえ、知らない様子なのである。

(もう後三日。——もう後二日)

と、平四郎は心のどこかで、朝夕、海野甚三郎の身に迫る死期を数えていた。

寝転んで、書^{ほん}を読んでいる間もふと、ニタリと、悪魔的な微笑^{ほほえ}みが自^{ひとり}で唇^{くち}の辺へのぼってくる——

(俺は何も知らぬ間に、他人がしてくれた復讐だ。天の為す事だ。思えばよくしたもの……)

と、思う。

——琴の音は、毎夜聞えた。——音は澄んでいて、乱れていない。何う聞いても、清純な処女の指から転ぶ音であった。

『だが、思えば、可哀そうな』

と、平四郎もふと思わぬでもなかったが、強いて、自分の心を、残酷に持つて、

(いや、当然だ。おれの苦しんで来たことに較べれば)

と、聴ての快哉を——その八絃の夢が断れて、お小夜が怨歎する日の快さを——昨日も今日も、ひそかに待ちつつ、土用

の休み日を暮していた。

二

もう今日は、虫干仕舞^{むしぼしじまい}。蔵収めの日であつた。

同時に、詮議の日数も、その日限り。

(分つたか。無い儘か?)

紛失した歌仙本の安否よりも——実は海野甚三郎の生死のわかれに興味を抱いて、平四郎は、その日から、城へ詰めた。

城内へ来てみると、いつぞやは知らない顔をしていた者も、今日には、公然と、

『盗賊は一体、外の者か、内の者か？』

『元より、外部の者だろう』

『いや、外部から忍び込んで、盗まれたとすれば、吾々も共に落度ではないか』

『下手人が城内にあるとすれば？』

『いう迄もなく、図書係りの甚三郎を疑うしかあるまい』

『だが、彼^あんな物を、盗んでどうするか』

『金になるさ』

『なるかな？』

『しかも莫大な金になる。上方^{かみがた}の茶道具屋の手にかかれば、

あの一枚でも、数百金に売れようというものだ』

などと、詰所を覗のぞいても、何処へ行つても、首を集めてその噂に持ちきりの態ていだった。

紛失の歌仙本は、遂に、其日そのひに至るも、下手人が知れなかつた。

——そこで、城番の松野豊後守は、係り役甚三郎に、自決うながを促し、その由を、江戸表へ急報すると共に、彼も又、幕府のお叱りを待つ、となつたのだ。

事件は、そうして、その朝、全貌を衆さらに曝したのである。

——甚三郎が切腹する！

これも人々を驚かせたに違いない。

何処よりも真つ先に、彼の家には、夜明け方、使が走つた。

萩井家へも、誰かが駈けた筈である。

(惜しい人間を——)

と、彼の才気や新知識を、哀傷む者もあつた。

(才人才に溺る——じゃないかな?)

と、密かに、歌仙本の行方も、彼の所為らしく、疑いの目で見
る者もある。

半日は、騒ぎに暮れ、午過ぎは、城内は重い空気につつまれ、
夕方からは、城全体が、死ぬ者の死の座のように、冷ややかな夜
気の中にあつた。

その中では、誰も皆、踵が地につかないように歩いてしたが、
唯一人、高安平四郎だけは、終日、冷然と、乾門の番衆小屋に
腰かけて、人の噂に口を入れなかつた。

三

真夜半まよなかの九ツ刻どき（午前零時）——までには、もう一刻とき（二時間）
ほどしかない。

正九刻しょうこのつに切腹と聞いているので、

（近づいて来たな）

と、口には誰も出さないが、番衆小屋の人々も、皆、無口にな
った。

どんな人間に対しても、その死となれば、日頃の憎悪ぞうおや感情を
超えて、誰もが、一種冷やかな厳肅感に打たれてくるものとみ

える。

『高安氏、交代だ。——休むがいい』

乾門は、四人ずつ交代で、四刻半よつはんから明け方までの入れ替りだった。

平四郎は、黙々と頷いて、内曲輪うちぐるわの休息所の方へ歩いて行った。

——すると、後から馳けて来て、

『高安』

と、呼び止める者があつた。

振向いて見ると、奥役の頼母木たのもぎ与四郎兵衛よしろうべえであつた。

与四郎兵衛は、胸と胸のつくほど近く寄つて来て、

『平四郎。聞けばおぬしは、萩井家の道場でも、据物斬りでは、すえものぎ第一の腕だそうだな。……嫌な役目だがひとつ引受けてくれんか』

『何ですか』

かいしやくにん

『介錯人だ』

『……?』

『——嫌だろう。誰も嫌がつて承知せんのだ。何といつても、日頃から一つお城に勤めていた同僚の首を斬るのだからな』

『甚三郎殿の介錯ですな』

『ウム』

『拙者で御不足がなければ勤めましょう』

『やってくれるか』

と、与四郎兵衛は安堵あんどした容子で、
 『じゃあ、奥の丸へすぐ来てくれい』
 と、先に立った。

四

そこは、武器櫓やぐらの下で、昼間でも暗い、板敷の部屋だった。
 ほかの部屋から持って来たらしい絹行燈きぬあんどうが一つ、ぼうと燈つ
 ていた。

『甚三郎殿』

頼母木与四郎兵衛が、頑がんじょう丈じょうな板戸を開けて、中へ云うと、

『はい』

と、割合に落着いた返事が聞えた。

甚三郎の声である。

数日、陽の目を見ず、ここに坐つたきりなので、色はよけいに白く見え、心もちしよすい憔悴して、日頃の美貌が、よけいせいそう凄愴にさ冴えて見えた。

『もはや、時刻でござりますか』

と、与えられてある一枚の畳のうえから云つた。

『いや——時刻はまだ——半刻の余もござるが、かいしやくにん介錯人の事

でござる』

『まこと寔にお手数てかずで……』

『番衆の内より、高安平四郎を選びました故、左様御承知ねがいたい』

『えっ』

甚三郎は、髪おののの毛まで顛かせて、

『平四郎が、私の介錯人ですとな？』

『お望み人もあろうが、勝手はゆるされませぬぞ』

『はっ……。だが、お訊ねいたしとうござる』

『何か』

『それは、平四郎から申し出たことでございまするか、それとも又』

『いやいや、然るべき者がないので、立会人の吾々から頼んだこ

とじや』

些いささか、心を安らいだように、甚三郎はがつくりと首を垂れ、

『……あ、左様でござりますか』

『まだ、時刻もある故、その間に、お書かき遺のこしておく事でもあれ
ば、それへ料紙りょうし硯いづりを上げてあるから、何なりとも』

『御好意辱かたじけない。それぞれへ、先程から一筆ずついたして置き
ました』

『お、左様か。——では』

と、与四郎兵衛が引き退がろうとすると——

『あ、もし。……暫く』

『何ぞまだ……？』

『お願いがござります』

『仰つしやつてみるがいい』

『余の儀ではありませぬが、介錯人が、腕に聞えのある高安平四郎とあれば、私も身躰みだしなみして、立派に死にたいと存じます』

『いや、尤もつともなおことば』

『就ては、甚だ恐れ入るが、妻の許まで、使を走せて、水装みずしようぞ束くを取寄せたいと存じますが、お許し下さいませうか』

『はて、其許そのもとに、妻がござったか』

『萩井十太夫殿の娘小夜は、十太夫殿の御病気のため、挙式は取り遅おくれましたなれど、自分の云い交した妻に相違ちがございませぬ。

——その小夜の許まで、誰方どなたかお使を願いたいのです』

『自分の一存では計らいかねる。お待ち下さい』
と、与四郎兵衛は退がった。

みずしようにぞく
水装束

一

『お城からお使でござりまする』
なかばふる
半、顫え声で、取次の者は、
しきい
鬨の外から告げた。

ほの
 仄暗い彼女の部屋は、萩戸と目の細かいえすだれ絵簾に囲まれながら
 も、冷ややかな香のけむりと、密やかな鳴咽おえつを今朝から閉じこめ
 ていた。

『……はい、何ですか』

人の気配に、お小夜は、強いてきつとした声で振向いた。

『御城内から、使の者が見えて、甚三郎様のみずしやうぞく水装束を取りに
 参りましたが』

水装束——云う迄もない死装束——彼女はぎくつとしたが、なほ猶、
 落着きを失うまいと努めながら、

『承知しましたと云って、使を返して下さい』

『お品は』

『後から私が自身でお城まで持参いたします』

取次が去ると、彼女は、次の化粧部屋へそつと移った。

彼女は、鏡台に向つて、眉を剃り、そして齒も染めた。

自分の所へ、死装束を取りによこしたのは、甚三郎もすでに、自分を妻として、検死や立会へ届け出たにちがいない。

(妻としてなら、死に際に、一目の別れを許して下さいるかも知れぬ。……もしそれが能わぬ時は、せめて、死骸をここへ戴いて帰つて来ましよう)

こう突嗟に思い出したからである。

お城までは、さして遠くもない。わざと仲間一人連れず、

彼女は、甚三郎の死装束を、白木の衣裳蓋へ乗せて、心づよくも、

歩いて行つた。

病床にいる父へも、何も告げなかつた。十太夫の容態は今朝から快くなかつた。

まだ、杯も挙げないうちに、この悲嘆である、怒濤どしとうのような涙がこみ上げたがつていた。けれど、十太夫の娘だつた。兵学教頭の家庭に仕込まれたお小夜であつた。——もう胸には次の大事をいっばいに考えつめていたのである。

(彼あのお方に、邪よこしまな行がある筈はない。誰か、甚三郎様を墜おとし入れよう為に、計つたことじゃ、たとえば甚三郎様の亡ない後も、きつと、その下手人を見出して、お怨みをお晴らし申しあげねばならぬ。それが私の生涯の勤めになつた……)

大手へ行く町通りを避けて、乾門いぬいの捌手からめてへ行く草原の中の町を、夜露に裾を濡らしながら、うつつに歩いてゆく彼女だった。

——すると、野中のひよろ長い樹の下から、誰か、人影がうごいて、彼女の後うしろから近づいて来たかと思うと、

『小夜どの。小夜どの』

と、呼びかけた。

彼女は、何かしら、ぞっとした。

高安平四郎の声——とすぐ感じたからである。

城内から使の出た後、平四郎も又すぐ、

『たしな躡みの一ひとこし腰を差し代えて参ります故——』

と、立会衆の控え部屋へ断つて、わが家へ、刀を取りに帰つたのである。

——だが、果して、それが目的だったか、又は、彼女をここに待ち受けるのが目的だったかは分らない。

然し、打ち見た所、平常の腰の刀ものとは、確かに違つて、寸長な見るからに反打そりうちの烈しい刀を横たえては居た。

『どなたかと思つたら、平四郎様でございましたか』

『暫くお目にかからなかつたが、今宵こよいは計らずも、一生に、又とあるまじき、不思議な役目を仰せつけられた。——あなた貴女も、この

平四郎も』

『……………』

彼女は、胸に抱いている水装束の台へ、ふと、眼を落したが、

『貴方に、不思議なお役目とは？』

と、涙も見せず問い返した。——いや、平四郎の姿を見た途端に、涙とは反対な、むしろ抗争的な強い意志が、ぐつと胸に立ち直っていた。

平四郎は、薄ら笑いに、齒を見せて、

『これが不思議な宿縁しゆくえんでなくて何としよう。——海野甚三郎

の介錯人は、かくいう平四郎に吩咐いいつけられましたぞ』

『げッ……。あなたが……。あの甚三郎様の御介錯を』

『お小夜どの。今、茅屋ほうおくから取つて来たこの備前長船びぜんおさふねは、自慢ではないが、すばらしく斬れますぞ。御安心なさるがよい』

『……………』

彼女の涙は、遂に、理性の堰せきを突き破つた。肩をふるわせて、俯向うつむくと共に、思わず地むせへ咽むせんでしまった。

けれどそれは、この期ごになつて、甚三郎の死を悲しむ涙などではなかつた。もつと強い、反抗的な、呪咀じゆそをこめた——口惜し涙であつた。

『あなたは…………平四郎様！ ……あなたはよくも、そんな事を、私の前で仰うやつしやられます』

『云いわれないううで何なにううしまししままししよう。海野甚三郎うみのしんざぶろうに対して、一寸の恩

もなければ、友達の誼よしみもない』

『けれど……そうして御自慢なざる据物すえものぎり斬のお腕前は、一体、誰から教えられたのでございますか』

『……ム。それは貴女の父十太夫殿からだったなあ』

『又。……今誇つて仰つしやつた、備前長船も、誰から戴いた刀だと思し召すか。それも、父の十太夫が……私が幼い時、笛吹川で溺れる所を、助けて戴いたお礼にと——貴方へ贈つた物ではございませぬか』

『それを、覚えておられたか』

『忘れて何といたしましょう』

『——ならば、生涯、口が腐つても云うまいと思つたが、平四郎

も一言申すぞ』

『オオ、仰つしやいませ！』

『……いや。……止そう』

と、平四郎は、感情の儘、こみ上げかけた声をふと落して、

『……大人げない。はははは』

相手が、冷ややかになると、彼女はむしろ赫^{かつ}として、

『卑怯な！ 卑屈な！ ……。その通り、何も仰つしやれないで

はございませんか』

『云えないと思うか』

『ええ、私には、何も云われる覚えはございませんもの』

『じゃあ云うが——小夜どの、貴女はよくも、この平四郎を弄^{なぶ}つ

たな』

『え……弄つたとは』

『まだ、甚三郎が長崎表から帰らぬうちの事……よう胸に手を当てて思い出してみるがよい』

『思い出す事？ べつに、あなたとの間に、そんな、心にふかく刻まれた憶い出は何もございません』

『ないっ？』

『ええ……ありませぬ！』

『では……では何日か——』と、平四郎の声の方が、顫えを帯びて、むしろ彼女よりは、女々しく聞えるほど甲走った。

『忘れもせぬ——』と、眼をふと塞いで、

『そうだ、其女そなたが十六の春、お父上の十太夫殿も、家族もあらかた、花見に出て留守だった。其女そなたは風邪かぜの床に、瞼まぶたを腫はらして寝ておつた。——そこへ拙者も留守を頼まれて欣うれしい看護みとりをしていた時、其女は、この平四郎に何というたか』

『その事は覚えていますが……そんな言葉は忘れしました』

『忘れた？』

と、早口にたたみかけて、

『——では、その夏、荒川の堤へ、螢狩りに行って、あの帰るさ、

闇路やみじを戻りながらの言葉は』

『みんなして、笑いさざめきながら、冗談を云い合つて帰りました』

『何！ 冗談だと？ ……。ウーム……冗談』

平四郎はもう、自分へ云つて自分で答えるように呻うめいて、

『すると……其女がこれ程の言葉は皆、戯たわむれ事であつたというのか』

『もしも、何か貴方のお心に、恋として残るような言葉でも云つたことがあつたでしようか』

『——もうよい。アアそんなものか』

平四郎は、何か、悪夢から醒めたように、凝じっと、空うつし身になつ

て星を仰いでいたが、

『小夜どの。……よく判つきり云つてくれた。では、其女はこの平四郎を、微塵みじんも、好きだと思つたことはなかつたのだな』

『ええ……。ただ、父から、生命いのちの御恩人じゃ、忘れてはならぬ、有難く思わねばならぬと、何かにつけて云われていたので——何うしたら、それが貴方に映るか』

『……ふ、ふ。そうか。それだけのものか』と、自嘲じちようして——

『それが、拙者を弄なぶり物にした証拠だ。だが小夜どの、きのうは他人ひとの身、今日はわが身。——天は公平だな、あははは』

『今のお言葉は、それ見た事かという意味でございますか』

『元よりの事』

『解りました。さては、卑劣な謀み事をして、甚三郎様を墜し入れた下手人は……？』

『なにッ』

『いいえ！ 貴方でございますいませうが。問うに落ちず語るに落ちる、今の言葉、貴方の仕業しわざにちがいないっ』

『——で、あつたら、何どうするか』

『もう、恩人とは云わさぬ。女ながら、萩井十太夫の娘、縄を打つてお城へ——』

『はははは。その細腕で』

『おのれっ』

お小夜は、抱えていた装束台を、小袖ぐるみ、相手の面おもてへ投げ

つけて、次の突嗟とつさに、短い刃を抜くや否、身を挺ていして、斬りつけて行つた。

四

平四郎は、喝かつと、氣当てを返して、

『洒落しやれた真似をするなっ』

と、身をひらいた。

刃のような彼の平掌ひらてが、彼女の手元を強くはたいた。

懐劍は、草むらへ飛び、彼女の体は、平四郎に手頸をつかまれて、前へ泳ぎかけた。

『其女そなたの惚れた男とは、少し骨の筋がちがうぞ。——介錯人の使命をうけたのを幸に、甚三郎の細首を落して無念をはらし、明け方迄には、他国へ逐電と考えていたが、もうこう口を割ったからには、お城へも戻れまい。女を討つたと云われては、末代まで、高安平四郎の恥になるから、生命いのちだけは助けてくれる。はやく城内へ戻つて、好きな甚三郎でも、助太刀すけだちに連れて来い。尋常の勝負なら、青沼の光沢寺で待つていてやる』

『……才才。云やつたな！……では慥たしかに、紛失物の下手人は』
『もうここ迄云つたら、誰の仕業しわざか、推量すいりょうがつくだらう。——早く、御城内へ訴えに馳けて行け。九刻ここのつを過ぎると、間にあわぬぞ』

云いながら、平四郎は、彼女の体を、勢よく草の中へ突き放した。

——女の力！ 及ばぬ腕！ 口惜しさに、彼女はいちど、わつとその儘、泣き崩れたが、

『ま！ まてッ——』

叫んで、再び起ちかけた時は、もう平四郎の姿は、草露の光る彼方へ、跳る魔形まぎようのように、馳け去っていた。

荒川づたい

『何^どうしたのであろう？』

立会の者の控え部屋では、当夜の検死を初め、役人たちが、顔を見合せていた。

『もう、九^{このつ}刻に近かろうが……』

『平四郎も戻らぬし』

『水装束もまだ届かぬというが』

云っている間に、その九刻は、髪切虫の啼く音のように、時計の間^まからギリギリと聞えた。

『いつ迄、待つても居られまい。——死罪の者に対して、猶予を
与えなどしては、江戸表への御報告も偽りになる』

当夜の立会人のひとり——城番加役宮崎若狭守わかさのかみの子息市之丞
がそう云つて、真つ先に、執行に立つた。

それに伴つれられて、

『では、折角せっかくの望みだが、水装束も間にあわぬな』

『小袖はよいが、介錯は誰がいたすな』

などと口々に呟きながら、時刻と、市之丞の言葉に促されて皆、
起ち上つた。

『平四郎の戻りが間にあわねば、ぜひもない、介錯はそれがしが
する』

この中では、市之丞が若かった。——で当然の意気らしく、それは響いた。

然し、御城番の次席である若狭守の次男なので、家柄としては、この中の誰よりも高い。それを老人達は、やや憚はばかって、

『いや、市之丞様のお手を煩わづらわさぬ迄も、誰か、居らぬ事はござりますまい。——誰か、即刻呼んで、申しつけますれば』

『いや、もう時刻がない』

市之丞は、大股に控え部屋を出、武器の櫓やぐらの下まで歩みかけた。

——と。そこへ慌あわただしく、

『お待ち下さい。甚三郎の切腹、暫く、お待ち下さい』

息を喘せいで馳けて来た与四郎兵衛が、切腹部屋の前まで出揃つ

た人々を見て、手を振った。

『何で留めなさる』

一人が、強くたしなめた。

『いや、下手人が、分つたのでござる！』

与四郎兵衛の言葉は、絶叫するようだった。

『——われわれは、まんまと、その下手人に、騙たばかられたのじゃ。

折角、御城内にいたものを、逸いっしてしもうたのだ』

『——して、誰だ？ 下手人とは』

市之丞は、眼を光らして、問い詰めた。

『されば高安平四郎と相分つた』

『何、平四郎——が』

皆、意外な顔を見あわせて、

『然らば、紛失物を奪つたのは、平四郎の仕業しわざと仰せあるか』

『甚三郎に、恨みがあつて、彼奴きやつが謀はかつたことだと申す』

『——誰の口からそれが知れましたか』

『今。御城門へ訴えて来た、萩井十太夫殿のお娘——小夜どのが
そう申すのじゃ。しかも、その訴えによれば、平四郎自身が、小
夜どのに、自己のやった復讐しかえしを誇つて、そのまま逐電ちくてんしたとも
云う。——これは偽いつわりであろう筈はない』

他に、下手人が出た以上、海野甚三郎にはもう、下手人の嫌疑はない。

然し、責任はまだ、充分にある。

それは、真実の下手人を、捕えることだ。人々の意見は、そこで即決を見て、すぐ甚三郎を、切腹部屋から出した。

そして、立会人と共に、すぐお小夜に会わせ、猶つぶさに、彼女の口から、真相を聞き取らせた。

『——では平四郎は、尋常に勝負するなら、青沼の光沢寺で待つといったか。確かに、そう云ったか』

甚三郎は、何度も、お小夜に確めた。

人々も、そこを大事と、耳をそぼだ敬てた。

お小夜は、有ありの儘ままに、

『はい、まだ貴方の死を見ないで去るのが、心遺のこりのように、確かに、そう云つて、逃げ退のきました』

と、答えた。

『それつ、すぐ手配をすれば——』

と、役人たちは、先を急せいで、すぐそれぞれの支度に急いだ。

討手の人数は、忽たちち揃そろつた。

日頃、平四郎と余り誼よしみのない若侍のうちから、約二十名ほど選す抜ぐつて、それに、練達な役人が三、四名付き添い——宮崎市之丞を、先に立てて甲府城から馳け出した。

それより一足先に、海野甚三郎と、お小夜の二人が、青沼村を

さして、急いでいた。こう二人は、当然、討手の誰よりも真つ先に向わなければ、一分が立たない立場にある。

城下端はすれから、荒川に添はつて、山地へ向いながら小一里も行く
と、右側の小高い所に、一字うの寺が見える。

まだ、明け方には、間があつたが、水明り星明りに、何処ほのとな
く灰青い明るさのある道だつた。

北斗おののの顫おののき

——それよりは、やや先に。

お小夜を突き放して、住み馴れた甲府の深夜も、惜おしげ気もなく捨てて馳けた高安平四郎は、真つ暗な光沢寺の山門を風のように潜くぐっていた。

庫裡くりへ廻つて、

『起きろ。起きろ』

ほとほととそこの戸を揺すぶる。

寝ぼけ眼まなこの納所僧なつしよそうが、

『どなたで？』

と、見上げた。

『江戸の者だが——』無造作むぞうさに云つて、

『泊っているだろうか？』

と、訊ねた。

皆まで訊かずに、

『あ……御浪人方のお連れで』

『そうだ』

『どうぞ……』

すぐ、蠟燭ろうそくをつけかける手を制して、

『坊主』

『はい』

『この光沢寺は、一蓮寺の別院だな』

『左様で——』

『一蓮寺は、御勤番加役、甲府在住の宮崎若狭守どのの菩提寺ぼだいじだな』

『仰つしやる通りでございます』

『——すると、この光沢寺と、宮崎家との縁故も、だいぶ浅くないな』

『はい。何かにつけ、お世話になっております』

『江戸から来ている——おれ達の連れの浪人達は、そんな筋から、ここへ寝泊りしているのじゃないか』

『よく……存じませんが、何しろまあ、どうぞ』

『いや、ちよつと聞いておきたいのだ。御加役の御子息、市之丞
 どのは、何日見えられたえ』

『今朝ほども、お見えになりました』

『今朝ほども——か。成程』

なるほど

『蚊がひどう御座いますから、どうか、中へお這入り遊ばして』

『奥に泊っている浪人たちは、何と申す名だな』

『えつ……御存じないので』

『忘れたのだ。まだ浅いつきあいだから』

『お一人は、菅馬之助様、御一名は、服部太蔵様と仰つしや
すがうまのすけ
はつとりたぞう』

います』

『どこにいる』

『この広い廊下を突き当って、右の端はずれの広間を御寢所はすにしてい
らっしゃいますが、お起し申して参りましようか』

『それには及ばん。——おい坊主ちよつと出い。戸外そとへ出い』

『な……なんでござりまするか』

平四郎は、僧侶の襟元をぐいと掴みよせて、怖しい眼で睨にらみつ
けた。

『怪我をしない所へ行っておれ。そして、静かにするのだぞ。声
を立てたら、斬り捨てるぞよ』

柳町の燈ひに飲み歩いて、今し方、大酔して歸つて来るなり、寝汚なく夜具の上に身を抛り出した二人だった。

——でも、油断のない男とみえて、服部太蔵がふと、

『おい、馬之助、馬之助』

と、連れの菅馬之助の耳を引つ張つた。

ううむ……と寝呆ねぼけ声を出して、何か、云いかける口を、叱つ、と抑えて、

『おかしいぞ。——おいつ、眼をさませよ。何か、庫裡くりの戸があいて、人声がするようだ』

と、囁ささいた。

漸ようやく、菅馬之助も、首を擡もたげて、

『人声が？ ……何処に』

『もう聞えなくなつたが』

『耳のせいだろう』

『風の音にも、心を措くという奴だな』

『金儲けとなれば仕方がない』

『明日は立とうぞ。足もとの明るあしたうちに』

『だが、あれだけ持っていた所で、路銀がなくなつちやあ』

『今夜は、事が決まると云っていたから、明日はお見えになつて、路銀もくださるだろう』

『……おやつ？』

『……？』

二人とも、喉のどに、唾つばを溜めた。みしりつと、廊下のきしみが、梁はりに伝わって、何か神経を尖らせられたからである。

——と。障子のすぐ外であつた。

『馬之助。太蔵。路銀をやろう、顔を貸せ』

『——げっ？』

勿はね起きて、あわてて、大刀を抱えこみながら、

『だ、だれだっ』

『この辺の遊び人だ。顔を貸してもらいてえ』

遊び人と聞いたので、頭から呑んで、

『こらっ、誰に断つて、這はい入つて来たか』

馬之助が、がらりと、障子をあけて顔を出す途端に、

『あのよ冥途の草鞋わらしせん錢。それっ』

ぴゅっん——と細い刃金はがねでも唸るように刀が鳴った。馬之助の首はわずかに胴へ皮を余して、でんと、廊下へぶっ仆れた。

『——あッ』

仰天して、服部太蔵が逃げかける背へ、平四郎は跳びかかって、ぶんと、肩先へもう一つ入れた。

うーむと、服部太蔵は、仰向けにひっくりかえ転った。然し彼の浴びたのはミネ打ちであつて、単に、眼を眩くらましたに過ぎないらしい。平四郎は、太蔵の体を、横抱きにして、元の庫裡から、何処ともなく、出て行つた。

——然し、それから後、間もなく、彼の姿は再び、本堂の前に

現われた。そして、正面の階段に、腰をおろして、白い北斗ほくとのま
たたきを、無言で見つめながら、何ものかを心待ちに待ち構えて
いるふうであつた。

三

『——おうつ、彼あれに、人影が』

今、此の寺の石段を喘あえぎ登つて来た男女ふたりは、一歩、山門を這入
るとすぐ、そう云つて、ぎくと足を竦すくめ合つた。

いう迄もなく、お小夜と、海野甚三郎のふたり。

白く、冴え切つたお小夜の決死の顔に反して、甚三郎の方は、

むしろ土気いろに、体も硬こわばり、どこか微かに顫ふるえていた。

切腹部屋から出された瞬間から——彼は、ふたたびもう、死というものを、思うのも怖しくなってしまった。

わけて、お小夜の姿を見てから、俄にわかに、未練な——生への執着が——堪らなく強くなっていた。

それに、武道にかけては、自信がない。

いわんや高安平四郎を相手にしては。

——だから、今、平四郎のすがたを、本堂の階段に見ると共に、
(まだ、後詰ごづめは来ないか)

と、山門うしろから後を、無意識にふり顧った。

平四郎は、意地悪く、

『来たか！』

と、彼方から男女ふたりへ声をかけた。

声をかけられてはもうそれ迄だった。

『才！ 居ったな、高安平四郎』

男女ふたりして、左右から駈け寄つても、平四郎は、腰かけている階段から、動こうともしなかつた。

『待つていたのだ』

そう云つて、底気味のわるい眼で——何どつ方ちから先に刀の錆さびにするか——と舌なめずりして見較べるように、

『相思相愛、死ぬも生きるも、一蓮れんたくし托しょう生と、ふたりして追つ

て来たな。——だが、こう見るところ、男の甚三郎には顛ふるえが見

える。長崎仕込みの輕薄才子——もし生きて添つても、その構えでは、すえしじゆう末始終が心もとない』

『な、なにを云うぞ。この期ごになつて、世よ囃まい言を』

『ふん……後の加勢が来るあいだ、世囃まい言を聞いていたほうが、其ちつ方に取つては、無難ではないか。——今度はお小夜に一言こと云おう』

と、少し膝を向けかえて、

『わら嗤わらつてくれ、おれは何という煩ほん悩のうの痴人か。其そ女なの一びん顰しん一笑しょうを、みな自分勝手に受け取つて、独りで恋をし、独りで悩み、独りで迷い、揚あげ句くの果に——又これからも、生涯独りで彷徨さまよい出でそうとしてゐる』

『……もう……もうそんな繰り言、聞く耳はないつ。甚三郎様に罪を着せる為、盗んだ品を、これへ出して、武士らしく、そなたこそ腹を切ったがよい』

彼女は、健気けなげに、詰め寄った。

眼にも入れない容子で、平四郎は、云いたい事を、云い続けた

『そこで、凡痴なおれは、腹の底から、甚三郎も又其女そなたも、恨みに思ったこともあるが、一日一日、おれの描いていたおれの幻は消え——わけても先刻さつき、草原の中で、正直な其女の気持を聞いてからは、朝の月みたいに、恋の相手は消えてしまった。——そして唯、今も胸に残っているのは、笛吹川から抱き上げた頃の——

十三、四歳のあどけない小娘だけだ。その小娘は、たとえわら嗤われ
ても、永遠におれは愛する！ ……愛さずにいられない！』

と、怪しくたか昂ぶった声を顫わせて、

『……では、甚三郎の御家内、お小夜どの、倅せに送るがよい。

——又、お小夜どのの良人甚三郎へも云おう。どうか末長く、可
愛がつてやるがいい。生あいにく憎とおてまえは才子肌だ、男にすら、

今度のように鼻毛はなげを抜かれる。まして女には、長いうちに何どうあ
ろうか。こんな女房を持って、浮気をしては罪だぞ。その時は、

平四郎がゆるさんぞ。——』

と、ぬつくと起ち上ったかと思うと、

『では、おさらば』

と、二人を捨てて、右の廻廊の方へ、ずかずか歩き出して行つた。

灯皿ひきらの罪

一

何やら、謎めいた言葉に、お小夜も、甚三郎もやや呆あつ気にとられていたが、平四郎が逃げる気と勘づいたので、はつとしなが

ら、

『——待てつ、御番城の宝物を掠めて、その儘、巧みに逃げようとして、そうはさせぬ』

と、甚三郎は、大きく呶鳴りながら、廻廊の上へ、匆ね上つて、背後から抜打に斬りつけた。

ばつ——と、刃風を顔の前へ交して、

『云い残した』

と、平四郎は、彼の小手先を、ぐいと掴んだ。

『お小夜どの』

と、次に、突いて蒐ろうとして^{かか}いる血相へ振向いて、

『紛失した歌仙本は、確かに、この寺の奥の客間にある筈。血ま

みれの中を後でよく検めてみるがよい。——猶、不審な事、分らぬ点は、この床下へ、ふん縛つて突つ込んである浪人へ問い糺すただがよい。——尤も、彼奴の口書は、いずれ密封の上、江戸表の評ひ定ようじようしよ所へ一通、御城番松野豊後守どのへ一通——各へ二通したたに認めて、後から飛脚でお届けするつもり』

と、伸び上つて、

『おお、後詰が来たな。——あの中には、御加番宮崎若狭守のせがれ市之丞も居ることだろう。あれも性の悪い凡痴の一人』

と、笑つて又、

『お小夜どの。其女そなたのような、あどけなくて、美しい処女おとめは、ちようど、夏の夜の虫を焼く絵行燈えあんどんのようなもの——燈ひに罪はな

いが、焼かれる虫にも無理はないのだ。——ただ市之丞のような
佞物ねいぶつは、焼いても飽き足らぬ佞物だが……』

もうその時、早くも、廻廊の横へ、裏手へ、

『逃がすなっ』

討手の声——そして登音の雪崩なだれ、——喚ひき、犇ひしめき。

——さらば！

と、云っている間もなかった。

どどどどつ……と廻廊の一角へ馳けて、ひらりと欄らんを越えた平

四郎の影は二、三名の者を刎ねとぼして、裏山の闇ふかく——い

やもう小禽ことりの声に明けかけた水色の黎明れいめいの中へ、溶け入るよう

に紛れてしまった。

二

『しまったつ。——早く、近道を登つて、先を塞ふさげつ』

市之丞は、馳かけて来て、追おい惑まどう侍したちを、叱しつ咤たした。

『うぬつ』

曉ぎ闇よの大地あから、不意ふに誰たか、彼の足あをつかんだ。

市之丞は、もんどり打うつて、

『あつ、何をいたすつ』

云いわせも果はてず、海野う甚し三郎ざうは、彼かの上うへ、馬う乗まりになつて、

『下げ手て人にツ、召め捕とつた』

と、嘯鳴った。

市之丞は、もがきながら又、怒りの眼をつりあげて、

『ば、ばかなッ。わしを下手人とは、何を申す。——発狂したか、甚三郎』

『だまれっ。かねて不審なかどもあるにはあつたが、よもや御加番の子息がと、打ち消していたのが不覚だった。——それがしを罪に墜し入れ、自滅させようと計った曲しれもの者は、確かに、汝に相違ないっ』

意外なことばに、役人や討手の侍たちも、ばらばらと駈け寄つて来て、一時は、まったく甚三郎の発狂かと怪しんだが、お小夜も共に、信念をもつていうので、

『では』

と、言葉にまかせて、床下を捜すと、俵たわらくく縛りに縛られた浪人の服部太蔵が引つ張り出されて、

『市之丞様、もう運の尽つきだ。あつしやあ、平四郎に責められて、もうすっかり喋舌しゃべつてしまいましたぜ』

と、泥を吐いてしまった。

彼の自白に依つて、総ては、明白になった。

市之丞も又、かねてから、お小夜を恋していた一人だったのである。

だが、お小夜はそれも、平四郎に対するのと同じように、何の警戒もしなかつたし、甚三郎に向つて、べつに注意もしていなか

った。

——けれど市之丞としては、多年の恋に、業を煮やし、あらゆる術策を尽した上の——自暴自棄なのであった。その果に、彼女の良人と選ばれた甚三郎を、自滅させる為に、二人の浪人を雇つて、歌仙本を盗めと唆かし、城内へ忍び込む手引までしてやったものである。

だが、市之丞の為た手口も、洗つてみると、極めてまずい、坊っちゃん仕事でしかなかった。——やはり焼け死ぬ虫は愚には違いないが、無心の絵行燈の灯皿の方に、むしろ罪ふかいものがある。無心であつても、罪ふかい灯のまたたきに、処女は心しなければならない。

(昭和十三年八月)

青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・43 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「婦人倶楽部 別冊付録」大日本雄弁会講談社

1938（昭和13）年8月

※「行燈」に対するルビの「あんどう」と「あんどん」の混在は、
底本通りです。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夏虫行燈

吉川英治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>